

LOOP HOLE

Slow Rush Yusuke Mitsufuji

一軒家のリビング 掃き出し窓から庭の景色が見える

それを窓枠が2つに分断している サッシを開けるとフレームは平行にスライドして 景色はさらに4つに分かれる

窓ガラスが一重になっている部分が2つ 二重の部分が1つ ガラスの無い部分が1つ それぞれ 微妙に見え方が異なっている

しかし 外に見える景色の位置は変わらない 庭に植えられた紫陽花の位置は変わらない

さらに網戸を閉めても 障子を閉めても その位置は変わらず 窓に影響を与え続ける

そもそも景色とは 窓枠と共に持ち運べるものではない 窓枠を移動させても 変わらずそこにあってこそその景色というものだろう

たとえシャッターを閉めたって 紫陽花はそこに在る

— 光藤 雄介

この度、LOOP HOLE では、光藤雄介の初の個展「Slow Rush」を開催いたします。光藤は、多摩美術大学芸術学科の在学中より、座学で美術史や理論を学ぶ傍ら、独学で絵画制作を行っていました。

絵画の表面上に現れる光藤のこだわりは、「マジックインキやボールペンなどコンビニエンスストアでも手に入れられる画材を使うこと」や「画面の表面にしか痕跡を残せない顔料系のインクを使うことよりもその奥へしみ込む染料系インクを使うこと」など、その他にも数多くあるようです。しかしながら、その目的は、それらのルールの先にある目には見えないアクチュアリティを顕在化させることにあるのでしょうか。光藤の描く線は、スキャナー機器の情報の読み取り方法のような方向の法則に妄信的に委ねられているかのように見えるのと同時に、作家のアクチュアルな身体性__小さな事故のような引っ掛かり__により像を結びます。その一方で、最終的にそれらの痕跡をカットニングシートで覆うことにより、その身体性の現れを薄め、さらに額縁を強調することで表面性を強調し、タブローとしての深度を複雑にしていきます。この制作過程のシステムは、展覧会タイトルの「Slow Rush」にも示されている、光藤の近年の絵画に対する相反する二つの姿勢__「抑制と潔さ」が画面上に共存し、作家自身の世界に対する内省をも想像させます。 (文責：林 澄子)

光藤雄介 1982年大阪生まれ、現在、神奈川／東京にて制作活動。2008年多摩美術大学芸術学科卒業

展覧会：「FUCHU OF MADNESS_無名祭祀書」(2014 LOOP HOLE 東京)、「ワンダーシード 2013」(2013 トーキョーワンダーサイト本郷 東京)、「第7回大黒屋現代アート公募展」(2012 板室温泉大黒屋 栃木)、「第7回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」(2012 岡三証券北ウィンドウ 東京)、「千代田芸術祭 2011_3331 アンデパンダン」(2011 アーツ千代田 3331 東京)

賞歴：「第7回大黒屋現代アート公募展」入賞(2011)

光藤雄介 「Slow Rush」

2014年10月11日(土) - 11月8日(土) ※月・火・水は、休廊 ※日曜日は、作家が在廊いたします

14:00 - 18:00 (初日は16:00 オープン)

レセプション：10月11日(土) 18:00 - 21:00

LOOP HOLE

東京都府中市宮西町 1-15-13

<http://studioloophole.com/>